

桜蔭俳話会 一月句会 (第三三回)

平成二十六年一月二十六日 (日)

会場・旭区民文化センター (サンハート)

書初や少し謀叛の随意筋 守

【自句自解】

筋肉には心臓の筋肉のように本人の意思に左右されずに日夜働く不随意筋と、腕や足の筋肉のように本人の意思に随って時限的に働く随意筋とがある。作者は字を書くのは生来苦手である。またまた拙い字を前にして、照れ隠しに、本当は上手いのに今日は手の筋肉が反乱を起こしていると強弁している。

何事も無きがしあはせ去年今年 友子

幸せとか、嬉しいとか、悲しいとかの作者の感情や普遍的観念のダイレクトな表現は、出来る限り控えた方が良い。また、前のフレーズが観念的な事柄や普遍的な事柄を言うものであれば、その後には具象物や具体的な景物を置くのが良い。

【添削】

恙なきことが一番去年今年

恙なきことが一番初淺間

倅せの尺度のなしや日向ぼこ ツル子

「倅せ」と「日向ぼこ」ではストレートにイメージの重なりがある。これは予定調和とも言われる。ここは「日向ぼこ」に代えて具象物を置きたい。冬に赤い実をつけてくれる同じような植物に藪柑子、千両、万両がある。物理的な大きさという尺度で言えば藪柑子は一番小さいが、明日への希望を感じさせる心理的側面では同じである。本当に幸福感は人様々であり、倅せには計る物差しはない。

【添削】

幸福の尺度や如何に藪柑子

錠剤の赤白黄色福寿草 守

【自句自解】

清記用紙は「赤色黄色」になっていたようであるが、出句短冊では「赤白黄色」。二色よりも三色の方が、薬漬けの現代医療の有様を形容するのに適している。また、俳句の音調リズムの点から言っても、この三色の並びが良い。

患者はみな少しでも良くなるように、あるいは病勢がこれ以上悪くならないことを願って、毎日毎晩医師から処方された錠剤を服用している。三つ目の黄色は、福寿草の希望に満ちた明るい色でもある。病が軽快することを希求した一句である。

墨の香や少し引かるる春障子 才美

障子として春の障子が良いのか冬の障子が良いのかについて、意見が出された。

作者の説明によると、春の日差しが障子一枚を通して注ぎ込む部屋で書道の稽古を続けていると、部屋の空気が次第に暖まるので、空気を入れ替えたくなり、そのために、障子が少し引かれて、空気の出入り口が作られている。春の景の句であるとする。

冬の景の句として、「墨の香や少し引かるる白障子」、とすることも出来るのではないかとする意見は、こうすると墨の黒色と障子紙の白色との対比がくつきり浮かび上がって来る、と言う。また、冬の景の句にすると、本来は冷気が入り込まないように閉めきつてある筈の障子を開けてみたいほど、稽古に熱中しているのだなあという感慨が浮かんで来る。「少し引かるる」がより効いて来る、というのである。

実景は別として、俳句的には冬の障子にした方が良いと思うが、どうであらうか。

父といふ遠心力や寒の月

守

【自句自解】

同時期に、「母といふ求心力や年始め」という句を作った。後者の句は、かけがえのない母親が待っているからこそ、息子や娘が実家に集まって来ることを詠んだものである。

作者にとって、父親は求心力ではなく、いつも遠心力であった。父親が営々と作り上げて来た世界を否定する訳ではないが、父の影響から切り離された別の世界に飛び立って行きたいと思っていた。「寒の月」はこれまでになされて来た自分の営為を総体的に示すものである。あるいは、そのような営為を遠くからいつも静かに、ときにははらはらしながら見守っていてくれた父の存在そのものである。

寒の水与へられたる命かな

守

【自句自解】

始めに、「与へられたる」の表記について、文語文法はどうしても苦手であるが、「与へ」は下二段活用の他動詞「与ふ」の未然形であり、「られ」は受け身の助動詞「らる」の連用形であり、「たり」は完了の助動詞「たり」の連体形である。

水を飲むとき、この命は、自分では長短の操作やコントロールができないものと、つくづく思う。何か偉大な存在あるいは絶対的な神を信じるわけではないが、自分自身の無力さをひしひしと感じる。誰かに生かされているという把握である。まだやり残したことがある者は、こちらの世界には来てはならない、ということなのであろう。寒の水を前にするとき、あらためて命とは何であるのかを考えさせられる。

窓拭きて心待ちなる初菫

清子

新年を迎えるための大掃除には窓ガラス拭きが当然含まれるから、窓拭きと、窓ガラスを通して見える初菫あるいは窓ガラスを照らす初菫とは、イメージ的に少し重なる。初菫を心待ちにするのは一般に共通していることであるから、「心待ち」で一句を支えることは難しい。「窓拭きて」から「曇りなき窓ガラス」を連想するとして、次のような添削案を考えた。

【添削】

曇りなき窓一面の初詣

売り家札張り付いてゐる冬木かな 明美

【鑑賞】

観察眼のよく効いた一句である。この冬木と売り家の位置関係は特に述べていない。遠くから木枯に飛ばされてきたのかも知れない。売り家の家主はこれまで生きて来た生活の拠点を人生のある区切りとして売り払おうとしているのであるが、その売り札を受け止めている冬木は、厳寒を生き抜くために葉を落し、木枯に耐えて立っている。客観的事実に即して成立した句は強い。

改札口二箇所となりし初詣 清子

【鑑賞】

追加された改札口が臨時のものであるのか、常設のものであるかは別として、作者は境内に向う人の流れが二つの源に発するのを見付けた。ただそれだけをやっているのに過ぎない。その社寺は、初詣だけに行っている所であり、いつもは訪れていないところなのであろうか。

社寺が多くての参拝客を引き付ける由縁については詳しくは知らない。でも、社を訪れて多くの参拝客と行動を共にしていると、何らかの安堵感・連帯感が生まれる。初詣という国民的行事はこうして毎年繰り返される。

初詣で重たき絵馬の犬社 ツル子

特別に言いたいことがなければ、「初詣」の後に「社」のことは言わない。一枚づつは軽くても、何枚も重ねて吊るされた絵馬の束は重たい。その束を持ち上げて祈願の文字を見たのだとすれば、添削案は次のようになる。

【添削】

初詣重たき絵馬の束開く

ジェット機の劈く音の年新た ツル子

ジェット機には、民間航空のジェット機と軍用のジェット機がある。劈く音とあるから、そのジェット機は軍用機なのであろう。正月三が日は飛行訓練を中断していた米軍基地は四日を待ち兼ねるように訓練飛行を再開した。その前の三日間が静かであっただけに、その騒音はまさに耳を劈くほどに感じられる。基地周辺では、住居には一定の防音工事がなされているが、一歩家を出れば圧倒的な爆音に直接曝される。でも、俳句的には「音」は余分であらう。

【添削】

人日や耳を劈く軍用機

抗体の生まるるまでのくさめかな 明美

【鑑賞】

「くさめ」は「咳」と並ぶ風邪の代表的症状であるが、これまでの俳句では面白可笑しく詠まれて来ている。これに対して掲句は、抗体を持ち出し、嘘かまことか知らないが、抗体が体内に出来るまでは、厄介なくさめが続くと言いつつ切っている。このように断定されてしまうと、そうなのかと首肯してしまう。まさに俳句は断定の文学である。評者が特選句に推した理由はここにある。

北風よ心の痛さ止めてくれ 直子

「北風」も「心の痛み」もマイナス要素であるが、作者は敢えて一句に持ち込んでいる。「北風」をプラス要因として働かすには、次のような添削が可能であろう。

上五部分は「北風よ吹け」で七音構成としてある。字余りは上五部分に吸収して処理する。これを昔から、「重たい荷物は網棚に置けばよい」と言う。「心の痛さ」は心に棘が刺さっているから痛いのだと捉えた。

【添削】

北風よ吹け心の棘の抜くるまで

歩かせてみたき大仏初詣り 幸

いつも鎮座している大仏を歩かせてみたい、という発想は既にある。この発想の使用を一概に否定するものではないが、「大仏」と「初詣」の組み合わせは一考を要する。初詣の行く先が寺であるならば、そこに居る仏に逢いに行くのであるから。別の正月の季語に置き換える。日にちを特定して「お元日」にすると面白い。

【添削】

歩かせてみたき大仏お元日

戸すべりを直して春を迎ふべく 葉子

助詞の「を」や「に」を安易に使用すると、句が説明的となり、散文となり易い。「戸すべりを」は「戸の滑り」にすれば、「を」を消すことができる。どうしても「を」を外せないとしても、使用するの一回だけにする。

【添削】

戸の滑り良くして春を迎へけり

自転車の冬菜みどりを零し行く 才美

自転車の荷台の下は直ぐ路面である。一般の自転車には、荷台を遮蔽する部材は特に装備されておらず、それだからこそ積載物がよく見え、それが零れ落ちる様もよく見える。荷台部分に遮蔽物のある自動車はこの点で大違いである。この自転車の構造的特性を強調するために、「自転車の」を「自転車や」としたい。

【添削】

自転車や冬菜みどりを零しつつ

垂れ枝の地軸を射るや寒真中 才美

地軸は地球自転の回転軸のことであるから、しだれ枝が地軸を射るということが判らない。枝先の向こうに地球の中心があるということであれば、地軸というよりも地心と言うべきである。作者が本当に言いたいのは、しだれ枝の先が地面に触れているか、少し地面に入り込んでいるのを見て、しだれ枝が地軸のように見えるということではないのか。添削案は次のようになる。

【添削】

垂れ枝の地軸のごとし寒真中

春浅しうすずみ色の雑木山 弘子

これはこれで出来上がっているが、早春の雑木山をうすずみ色と形容することはよくあるので、さらに推敲が必要であろう。

巫子の舞ふ指の先まで淑気かな 幸

「の」は重宝な助詞であるが、句を冗長にし易いので、多用しないように工夫すると良い。

【添削】

巫子舞ひの指先にある淑気かな

ロックバンド・ジャズバンドあり弾始め 友子

言葉を整理することに気を付ける。

【添削】

弾始めロックにジャズのバンドマン

分解の錠へ油と冬日差す 明美

「差す」に着眼した発想は面白いが、分解した錠に油を差しているのは人間であり、冬日を差しているのは太陽であるから、これら二つの事象を「と」で結合するのには違和感がある。

【添削】

分解の錠へ油や冬日向

山脈の近付いてをり寒日和 弘子

【添削】

山脈の近づいて来し寒日和

寒雀狙ふ猫の背丸まれり ヤエ子

背中を丸めていると言うことで、猫が狙いをつけていることは判るのではないか。

【添削】

猫の背を丸めをりけり寒雀

大寒の小枝ゆるがぬ水面 秀一

大寒の静寂のなか、小枝一本の影も揺れていないと言うことだけで、他を受け付けない水面の固さを表している。

旅誘ふ駅のポスター春隣 秀一

上五に「旅誘ふ」と置き、中七を「ポスター」でつなげ、下五に「春隣」を据えたのでは、少し甘い句とならざるを得ない。一考が必要である。都知事選挙もあることから、観光ポスターを選挙ポスターに替えてみる。

【添削】

色褪せし選挙ポスター春隣

ひとくさり孫目慢して初句会 守

【自句自解】

「孫」は祖父祖母の年代から見れば絶対的な存在であり、孫の可愛さを詠んだ句は否定できないものと、出句者は確信している。他人の覚めた目から見れば、孫を詠んだ溺愛の句は所謂出来合いの句として、大方はあまり新鮮さがない。孫自慢は句会前の雑談で大いにすればよく、本番の句会には、水準を越えた孫俳句以外は出して欲しくないと思う。年長者は年を重ねた分だけ、多くの句材となるべき事象に遭遇していると思うので。

ポットより明るきリズム寒波来る 明美

【鑑賞】

特別に名所旧蹟を訪ねなくても、日常生活の身の回りの事象から俳句が作れることを実証した句である。作者は、湯のポットの栓付近から聞こえて来る音に明るいうリズムを聴き取ったのである。この明るいうリズムと寒波襲来との対置は絶妙である。

老姉妹の昔話や冬籠 友子

昔話に耽るのは大方老人同士であろうから老姉妹の「老」は要らない。「冬籠」と「昔話」のつき具合も気にはなる。冬籠で顔を突き合わせていれば、通常昔話になるのではないか。とすれば、姉妹がそこに存在していることを言えば良いのではないか。省略に省略を重ねて、添削案は次のようになる。

【添削】

姉ひとり妹ひとり冬籠

待ち合はず港のテラス春隣 秀一

実景がそうだとしても、「港のテラスに待ち合はず」春隣では、少し甘くなる。添削案は次のようになる。

【添削】

待ち合はず畏友のひとり春隣

(文責 代表 増田 守 不在投句 古野明美、稲葉幸、綾井葉子)

【事務局からお知らせ】

○二月の句会は休みです。

○三月句会

三月二十四日(月)午後一時から、旭区民文化センター(サンハート)で行います。

○第一二回通信句会作品募集

冬に属する季語を用いた三句。締切りは二月十日。同封の葉書でお送り下さい。